

俺は乗客を睨み据えといて次から次へと進む。

客車は十程もある。

「キサマ達は安閑としてゐやがる、俺はダマイストのダガバジだ。

刑事の奴が俺を精神病者と間違えて、二人も追いて來よる。

俺は無機物有機物を問はず一切のものに危害を加へようとした事なんか無いのだ。

夫に何ぞや。

俺の睡眠も性欲も、其の他の生活も、丸で田樂のやうに彼奴の爲に掻きまぜられ、俺は自分の血脈に申し譯ない程、疲勞其の極に達してゐる。

でも心配するな。

觀音經を知つてゐるダマイストは世界中に俺一人なんだ。

俺はキサマ達の細布や、またくらを睨ひはしないから」

大聲で饒舌り乍ら、俺は遂々後部の一番端の車掌の居る所へ來てゐた。

車掌は手帳に何か書いていたりしてゐたが、俺を見て驚いた。